

令和6年度 入学者選抜試験問題

国 語

〔100点〕
〔50分〕

実施日：令和6年1月11日（木）

※ 下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示があるまで開かないこと。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 試験時間は10：20～11：10の50分であり、途中退室は認めない。
2. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開かないこと。
3. 解答用紙には、解答欄のほかに、受験番号・氏名の記入欄があるので、下記を参照し記入・マークすること。
 - 受験番号欄 上段に受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークすること。
 - 氏名欄 氏名・フリガナを記入すること。
4. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせること。

— 開始後 —

1. この問題冊子は23ページである。確認してページの落丁・乱丁・印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせること。
2. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄へのマークによって行うこと。
例えば

40

 と表示のある問いに対して ③ と解答する場合は、次の(例)のように解答番号40の解答欄の③にマークする。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
	1	2	3	4	5
40	①	②	●	④	⑤

3. マークはHB, 2B, Bの鉛筆で行い、所定欄以外にはマークしたり、記入したりしないこと。
4. 解答用紙は汚したり折り曲げたりしないように特に注意すること。
5. 訂正は、消しゴムであとが残らないように完全に消し、かすが残らないようにすること。
6. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせること。ただし、問題に関する質問は受け付けない。

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間という動物は他の生き物に比べて異様だ。ちよつとした巢を作る動物はいる。言葉でコミュニケーションする動物も珍しくはない。しかし現代の人間は巨大な都市を造り、音速を超えるスピードで移動し、言葉から文字、さらにインターネットにより視聴覚情報を世界で共有できる。こんな生き物は、地球の歴史をふり返っても、人間という、たった一種の動物だけだ。

ぼくは三〇年ほど皮膚の研究を続けてきた。その中で、人間の皮膚が持つ、様々な能力を見つけてきた。そして今、人間という（I）の動物が生まれ栄えてきたのは、その皮膚のためではないかと考え始めている。

人間の皮膚は、とても変わっている。異常な皮膚と言ってもいい。鏡の中、職場や通勤電車の中で見る皮膚は人間の皮膚だ。ふだんから見慣れているので「何が変なんだ？」と思われるかもしれない。

（a）動物園に行こう。ライオンもパンダも全身にみっしり毛が生えている。ゾウ、サイ、カバは毛が少ないが、見るからに薄い人間の皮膚に比べて、とても分厚そうだ。実際、彼らの皮膚は数センチの厚みがあり、せいぜい数ミリの人間の皮膚に比べて、とても厚い。

ワニやトカゲ、ヘビのような爬虫類も見に行こう。彼らの皮膚はウロコで覆われている。ワニの皮は硬そうだ。実際、ハンドバッグなんか加工されている。カメに至ってはウロコで覆われた身体をさらにコウラで防御している。

ペンギンやフラミンゴ、フクロウといった鳥を眺めると、全身が羽毛で覆われている。彼らの脚を見るとウロコが見える。最近の説では、鳥類は、爬虫類である恐竜の子孫だという。

哺乳類の中でも、いや、霊長類と呼ばれるサル、さらにその中で人間に近いとされる類人猿、ゴリラやチンパンジーと比べても、人間の皮膚は特異だ。体毛がほとんど無く、皮膚の表面は環境に、外の世界に直接さらされている。人間が体毛を失ったのは一二〇万年ほど前だと考えられている。体毛を失った人間の祖先は、環境に、外の世界に直接、皮膚を触れさせた。

この特異な皮膚を持ったために、人間の脳も他の動物とは異なる進化を遂げた。体毛を無くした頃から、脳が大きくなってきたのだ。

その表皮と脳という二つの情報処理装置を持つことによって、人間は、他の動物にはできない創造が可能になった、とぼくは考えている。

《1》皮膚を直接、環境に世界に接触させている人間にとって、皮膚は、世界と自身の境界、インターフェイスだ。その中でも皮膚の最表層にある〇・二〜〇・〇六ミリの厚さしかない表皮と呼ばれる組織、これが人間の命を護るバリア機能を担っている。表皮は常に更新されている。最表層で、死んだ細胞と、その隙間を埋める脂質で構築された角層（角質層）という一〇〇分の一ミリほどの厚さの膜ができるが、これは同じ厚さのプラスチック並みの水の通し難さを持つ。この角層のおかげで、ぼくたちの体内の水は流出せず生きていける。その機能も進化の過程で向上し続け、たとえば人間に近い存在であったネアンデルタール人より優れている。

また、外部の病原体、菌やウイルスのようなもの、これを防御するのが免疫システムだが、その最前線も皮膚、表皮にある。免疫系はまた、自己と非自己を峻別するものであると考えられている。一人の人間、それが他の人間と異なる存在であることを、はっきり示すのも表皮だ。この免疫システムも人間の進化と共により精密になってきた。免疫システムの異常で起きる痛風にかかるのは、哺乳類では、類人猿と呼ばれるゴリラ、チンパンジー、そして人間ぐらいだ。そして人間の免疫システムには類人猿、ネアンデルタール人からさらに進化した痕跡が認められる。

心理学者のクラウディア・ベンティーン博士は、十七世紀まで、皮膚は、その人間を表す存在だったと主張する。それまで、たとえば体調は皮膚に現れる現象だった。東洋医学では、まだその方法論が用いられ、顔色、舌の状態を診る。あるいは手首の脈動を触って診断を下す。また、日本語で「あの人は学者肌だ」「肌が合わない」などという表現は、肌——皮膚がその個人の本質につながっていることを示している。あるいは営業部に配属された新入社員に先輩が「現場に行つて、お客様の気持ちを肌で感じてこい！」などと言う。《2》

(b) ヨーロッパでは、十八世紀になって解剖学、臨床医学の発展と共に、ぼくたちの命、生活を支えるのは身体内部の臓器であつて、皮膚はただ、それらの境界に過ぎない、むしろ生命を支える臓器を覆い隠すもの、とみなされるようになったという。現代の英語表現でも skin-deep は「うわべだけ」という意味だし、skin game は「いかさま、インチキ」である。皮膚は、何の意味もない、

むしろ大切なものを隠ぺいする、みかけだけのものに転落してしまった。

わずか三〇年ほど前までは、表皮は角層を形成するだけのために存在すると考えられていた。触覚を担っているのは真皮に入り込んだ神経の先端にある装置（終末装置）であり、圧力や振動、あるいは傷ついたときの痛みを感じるセンサーはそれらだけである。また、温度や酸、刺激物を感知しているのは表皮に入り込んだ神経線維（自由神経終末）であると信じられていた。そこで圧や振動、温度や刺激物が感知され、脊髄^{せきずい}を經由して大脳皮質で知覚される。だれもがそう思って疑わなかった。

《3》今世紀になってから、表皮は様々な世界の出来事、温度、気圧、酸素濃度、電場、磁場、音、色、匂い分子や味分子などを感知することがわかってきた。言い換えれば表皮には、触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚があるのだ。人間の皮膚は、人間が感知する様々な出来事、そのほとんどを眼や耳、鼻や舌とは別に、感知する機能を持っている。さらに表皮には情報処理のしくみもある。情報処理とは、外から得られた膨大な情報の中から重要なものを選び出し、組み合わせ、その結果としてのメッセージを発信することだと思う。難しいのは「選び出す」作業だ。インターネットの世においては、情報の集積を抱える「Ⅱ」の価値がなくなった。小学生に「構造主義について述べよ」という宿題を出しても、文章の脈絡を理解できる程度の優等生なら、検索をして、コピー&ペーストでレポートは書ける。今「頭が良い人」は、知識が豊富な人間ではなく、知識の中から、必要な情報を選別し、新しいモノの見方、考え方を提示できる人だと思う。表皮はかなり優秀なようだ。

《4》脳では、全身からもたらされた情報、これまでの経験から得られた記憶、言い換えれば学習の成果、それらを組み合わせ、生きるためのメッセージを全身に届け、人間の行動を導く。その情報処理のプロセスの基本は単純だ。たった二つの電気的状態が基礎となっている。脳の中の神経細胞、これには「興奮」と「抑制」と呼ばれる電気的な状態がある。脳の神経細胞は、多くの経路で細胞同士が結びつけられていて、「興奮」と「抑制」が脳のうちこちで起きる。これが脳の情報処理の実態だ。

脳の細胞の「興奮」と「抑制」は受容体と呼ばれるスイッチで起きる。興奮を起こすスイッチを作動させるのはアセチルコリンとかグルタミン酸のような物質だ。抑制はガンマアミノ酪酸とかグリシンと呼ばれる物質だ。脳科学本に出てくるセロトニン、ドーパミン、メラトニンなどという物質も「興奮」「抑制」を起こす。これらの物質は情報伝達物質と呼ばれる。《5》

今世紀の初め頃、これらの情報伝達物質、そして、それらで駆動されるスイッチ（受容体）が、ほとんど、そっくり表皮、詳しく言えば表皮を構築する細胞ケラチノサイトに存在し、ケラチノサイトにも「興奮」と「抑制」という電気状態があることがわかった。

脳で情報処理がなされている場合、脳のあちこちで、時間と共に変化する（Ⅲ）な動きが現れる。それらが相互作用しながら、情報処理のプロセスが進んでいると考えられている。そして表皮を構築するケラチノサイトを培養皿で育て、そこに刺激を与えると、やはり時間と共に目まぐるしく変化するパターンが観察されるのだ。この数年の間に、たとえば指先で何かを触ったとき、それがどんな形なのか、まず皮膚がある程度、識別して、その情報を脳に送っているのではないか、という研究が報告されている。あるいは、表皮ケラチノサイトだけを刺激するだけで「痛い」という意識、知覚をもたらすことも証明されている。

脳の役割は情報処理だけではない。処理された情報を基に、全身に指令を出す役割がある。たとえば、危険や不安にさらされてストレスを感じる。そういう場面では、じっとしている方が安全だ。エネルギーの消費も抑えておいた方がよい。（c）脳は、副腎と呼ばれる臓器にストレスホルモン、コルチゾールを合成して放出させよと命令する。血中コルチゾール量が高くなると眠くなる、だるくなる。「まあ、しばらく静かにしている」という意味だろう。同時に、実は免疫系が病原菌を駆除するプロセスである炎症も抑えられる。

このコルチゾール、表皮が乾燥にさらされると、表皮でも合成、放出されるのだ。脳がストレスを感じたときも、表皮がストレス（乾燥）を感じたときも、ストレスホルモン、コルチゾールがそれぞれの場所で作られ、放出される。乾燥にさらされた表皮がコルチゾールを作るのは、乾燥に伴う炎症を抑えるためかもしれない。（d）表皮のコルチゾールは脳、情動に影響している可能性がある。それ以外にも、脳で合成されて、全身の状態を調整するホルモンと呼ばれる物質の多くを表皮ケラチノサイトは合成できる。

（e）、今世紀になって話題になっているオキシトシンだ。古くから知られているホルモンで、赤ちゃんが母乳の乳首に吸い付くと、お母さんの脳から放出され、母乳を作れと指令する。あるいは、分娩のとき、それを促す陣痛促進剤として投与されるのもオキシトシンだ。

ところが、このオキシトシン、人が人を信頼する意識の働きにも関わっていることがわかった。マッサージされるとオキシトシン血

中濃度は上がる。オキシトシンを静脈注射すると不安症を軽快させる。マッサージすると、その刺激が脳に伝わり、脳でオキシトシンが合成、放出されると考えられてきたが、ぼくたちは表皮もオキシトシンを合成し、刺激と共にそれが放出することを証明した。そうになると、マッサージされてリラックスする、そこに関わるオキシトシンは脳から出たのか表皮から出たのかわからない。オキシトシンは化合物の名前であって、X。

人間の皮膚は、人間が持つ感覚のすべて、眼や耳や鼻や舌で感じるもの、それ以上を感知する能力がある。そして、そこで得られた情報を処理して脳に送っている可能性がある。一方で、その情報を基に、脳が全身に命令するのと同じホルモンなどで、脳とは別に全身に皮膚が指令を送っている可能性もある。さらには、表皮の指令が脳に届いていることもありそうだ。そう考えると、表皮への刺激は、人間の意識、無意識に作用しているようだ。その結果、人間の判断、情動は、皮膚、表皮と密接なつながりがあるのだらう。いくつかの心理実験で、皮膚への軽い刺激、それが人間の判断に影響することが示されている。

(傳田光洋『サイバイバルする皮膚』より)

問1 本文中の (a) (b) (c) (d) (e) に入る語として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は (a) 1、(b) 2、(c) 3、(d) 4、(e) 5

- ① しかし ② では ③ さらに ④ たとえば ⑤ そこで

問2 本文中の（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は（Ⅰ） 、（Ⅱ） 、（Ⅲ）

- | | | | | | |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|
| I | ① 千載一遇 | ② 前代未聞 | ③ 万古不易 | ④ 一騎当千 | ⑤ 将来有望 |
| II | ① 図書館 | ② 博物館 | ③ 物知り | ④ 哲学者 | ⑤ 研究者 |
| III | ① 連続的 | ② 生理的 | ③ 集合的 | ④ 機械的 | ⑤ 電氣的 |

問3 次の一文は、本文の《1》～《5》のいずれかから抜き出したものである。文が入る箇所として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

しかし、人間の表皮の役割は防御機能だけではなかった。

- ① 《1》
② 《2》
③ 《3》
④ 《4》
⑤ 《5》

問4 傍線部A「人間の皮膚は、とても変わっている。異常な皮膚と言ってもいい」とあるが、これは筆者がどのような点に着目して述べているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 10

- ① 人間がその皮膚の特異性で他の動物とは異なる進化を遂げた点。
- ② 人間の皮膚には、従来考えられていたよりもさまざまな能力がある点。
- ③ 鏡の中や通勤電車の中でも、人間が自分自身で見ることができる点。
- ④ 恐竜の子孫である爬虫類の面影としてのウロコに覆われていない点。
- ⑤ 人間の皮膚は体毛がほとんどなく、外の環境に直接触れている点。

問5 傍線部B「表皮はかなり優秀なようだ」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 11

- ① 同じ厚さのプラスチック並みの水の通しにくさを持ち、体内の水の流出を防いでいるから。
- ② 菌やウイルスのような外部の病原体の侵入を防御する役割を果たしているから。
- ③ 人間が感知する様々な出来事を耳などの感覚器官とは別に感知する機能を有するから。
- ④ 外から得られた膨大な情報から重要なものを取捨選択し、発信しているから。
- ⑤ 情報処理の仕組みにより、外から得られた膨大な情報を蓄えておくことができるから。

問6 傍線部C「これが脳の情報処理の実態だ」とあるが、その具体的な説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

- ① 「興奮」と「抑制」という二つの電気的状態が、脳のさまざまな神経細胞の経路で生じること。
- ② 全身からもたらされた情報やこれまでの経験から得られた記憶が人間の行動を導き出していること。
- ③ 「興奮」と「抑制」という二つの電気的状態が基礎になって交互に脳のあちこちに生じること。
- ④ 脳の細胞の「興奮」と「抑制」が受容体というスイッチで生じ、それを作動するのはアセチルコリンであること。
- ⑤ 上方で伝達物質と呼ばれるセロトニンやドーパミンが「興奮」「抑制」という基礎的な電気状態を起こすこと。

問7 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

- ① 脳でオキシトシンが合成されているわけではないのだ
- ② どこで作られたかは効果には関係ないのだ
- ③ リラックスできるかどうかには関係しないのだ
- ④ 表皮がオキシトシンを合成することが重要なのだ
- ⑤ 刺激が脳に伝わる事こそが重要なのだ

問8 傍線部D「その結果、人間の判断、情動は、皮膚、表皮と密接なつながりがあるのだろう」とあるが、この推測の根拠として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 14

- ① 脳の役割は情報処理能力だけではなく、処理された情報をもとに脳に指令を出す能力もあること。
- ② 人間の皮膚には情報処理能力があり、人が人を信頼する意識の働きにも関係していること。
- ③ 人間の皮膚は人間がもつ感覚の目や耳や鼻や舌で感じるもの以上を感知する能力があること。
- ④ 脳とは別に表皮が指令を送っている可能性や表皮の指令が脳に届いている可能性があること。
- ⑤ 人間が意識的もしくは無意識的に、表皮から受け取った情報を脳に伝達しているということ。

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 15

- ① 人間という動物が特異なのは、巨大な都市を造り、音速を超えるスピードで移動し、文字やインターネットで視聴覚情報を世界で共有できる点にあるのではなく、その皮膚の特性による。
- ② 爬虫類は分厚いウロコで覆われているが、より進化したライオンやパンダの皮膚は全身がみっしり毛で覆われているものの爬虫類と比べると薄いことが特徴である。
- ③ わずか三〇年ほど前までは、表皮に入り込んだ神経線維（自由神経終末）が、温度や酸、刺激物を感知し、そこで感知されたものが大脳皮質で知覚されると考えられていた。
- ④ この数年の間で、指先で何かを触ったとき、それがどんな形なのか、まず脳がある程度、識別して、その情報を皮膚に送っているのではないかということが研究の結果確かめられてきた。
- ⑤ 人が人を信頼する意識の働きにも関わっているというホルモンは、マッサージされるとその血中濃度は上がるが、表皮そのものがそのホルモンを放出することはない。

(問題は次のページから始まる)

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちは、この社会の中で様々なレベルで生きている。まずひとりひとりの個人として生き、家族の一員として生きている。それは私たちにとって最も「近い」世界であり、近い風景という意味で「近景」とも言うべきものだ。他方で私たちは日本という国家の一員として生きている。これは「遠景」と言ってもいい。その「近景」と「遠景」の中間に、いわば「中景」としてコミュニティーは存在してきた。それは村や町のような地域社会であり、子どもたちが集まる学校であり、仕事の間としての会社などだ。しかし、そうやって挙げてみると、現在の日本で力を失ってきているのがこの「中間社会」だということは明白だろう。かつて地域社会や村が私たちを支えてきた時代があった。しかし、いま地域社会に支えられて生きていると思っている人がどのくらいいるだろう。かつては学校もコミュニティーの中心だった。しかし、学校という場は既にそのキュウシン力を失ってしまっている。そして会社だ。かつての会社は私たちの面倒を何から何までみてくれるものだった。仕事、お金、福祉、そして希望。しかし、現在の会社はもはやそうではない。会社と私たちのあの揺るぎない信頼関係はもはやそこにはないのだ。

こうした「中間社会」の凋落は、新自由主義的なグローバル리즘によってますます激しいものとなっていく。会社で隣に坐っている同僚と私は生き残りをかけて争うライバル同士だ。社長も会社の業績が一番いいときに会社を売って、億万長者となって逃走してしまう。その会社にいる間にできるだけ効率的に利益を引き出し、それができなくなれば報酬の高い会社に移ればいい。それが「構造改革」の勧める生き方である。学校という場も、生徒ひとりひとりの効率性を高める場として考えなければいけない。そして地域社会もその中で崩壊していく。もはや昔のムラのような、ひとりひとりの自由を許さないような地域社会は私たちにとって抑圧にしか思えない。しかしそこから解放された都会の地域社会も既に地域社会とは呼べないような、隣に誰が住んでいるかも分からないような社会となってしまった。

そのように、私たちはいまかつてのコミュニティーの、「中間社会」の崩壊の時代を生きている。それは、コミュニティーに支えられることなく、私たちひとりひとりの「個」がむき出しにされている社会だと言ってもいい。それは非常にリスクの高い社会でもある。

いままでならば、会社の専門家がお金を動かし、投資を行っていた。これからはひとりひとりが投資家だ。そしてそこで利益が得られれば私のものになるが、大損しても誰も守ってくれない。しかし、冷静になってよく考えてみれば、私たちひとりひとりは投資の専門家ではないから、そのような素人に投資を任せれば、専門家の思うつぼになることは目に見えている。しかしそれが私たちの社会における「自由」である。「個」は中間社会から解放されるかわりに、すべての責任を負わせられるのである。

人間はそもそもそのような「支え」のない社会には生きていけない存在だ。しかし、そこに支えるべき「中間社会」はもはやない。ならばどうしたらいいのか。グローバリズムを論ずるときに、グローバリズムとナショナリズムや宗教的原理主義がコインの表裏だと言われるのは、そうした時代状況によるものだ。中間社会に支えを求められない私たちは、「遠い」レベルであった国家意識に支えを見出そうとする。コミュニティへの帰属意識が失われ、むき出しになった「個」は、国家や宗教への帰属意識で何とか帰属感を満たそうとし、そこにナショナリズムや宗教的原理主義が生まれてくるのだ。

グローバリズムとナショナリズムや原理主義とはそもそも全く正反対のものである。国家の国境を越えていこうとするグローバリズムは、国家というひとつのまとまりを解体していく方向性を持っている。しかし、グローバリズムが進展すればするほど、皮肉なことに、現実にはナショナリズムや原理主義の意識が各国で高まっていく。グローバル化する世界に対抗しようとするイスラム原理主義の台頭はもう指摘する必要もないだろう。ヨーロッパ各国における「極右」排外主義勢力の伸張は記憶に新しい。そして、皮肉なことは、グローバリズムを牽引してきたアメリカ合衆国自身が、宗教的原理主義とナショナリズムの性格を急激に強めてきたことである。

しかし、世界におけるこのグローバリズムとナショナリズム・原理主義の併存は極めて重大な問題を含んでいる。

それはひとつにはナショナリズムや原理主義が常に暴力性へと展開しやすいという構造を持っていることであり、それに関しては多くを指摘する必要はないだろう。しかしそれ以上にここで注目しておきたいのは、グローバリズムもナショナリズムも「多様な意味」の圧殺の上に成り立っているということだ。報酬という「数字」の上に立脚しているグローバリズムは私たちが多様な意味を生きていることを捨象するシステムだ。そしてそれと同様に「私たちは〇〇人だ」といった同一性の意識のみを強調するナショナリズムや、ひとつの宗教的な立場のみをシコウのものとする原理主義もまた、私たちが多様な意味を生きていることを忘れさせるシステムなのであ

る。

第4章で、私は「数字信仰」とは「生きる意味」を捨象して、横断的に通用する「数字」で物事を解決しようとする」ことだと書いた。この「数字」のところを「日本人」と入れ替え、「生きる意味」を捨象して、横断的に通用する「日本人」の意識で物事を解決しようとする」とすればそれはナシヨナリズムとなる。つまり、私たちのいま向かっている社会は、「生きる意味」を捨象して、自分の頭も感性も使わずに、「数字」や「日本人」といったレベルで物事を解決しようとする」ような社会なのである。

私たちひとりひとりが固有の「生きる意味」を持つているということは、ひとりひとりの「ワクワクすること」と「苦悩」を生きていくということである。他者を尊厳あるものとして見るということは、他者の「ワクワクすること」と「苦悩」に対して鋭敏や感受性を持つということだ。そういった他者の「生きる世界」への内的感受性を育てる方向性ではなく、「数字」や「日本人」といった、頭も心も使わなくていいレベルで何とか社会の統合をはかろうとする、社会の活性化をもたらそうとする。「このごろの社会は思いやりを欠いていますねえ」とか「最近の子どもたちは人の痛みが分からない」とか嘆く声が多く聞こえてくるが、そういった、「内的成長」の次元を無視し、私たちひとりひとりの尊厳、かけがえのなさへの配慮を欠いた哲学で成り立っている社会が、「人の痛みが分ならず」「思いやりを欠く」人々を生み出し、様々な深刻な問題を引き起こしているのはあまりに当然のことなのである。

とすれば、私たちの社会にいま必要なことは、私たちの「生きる意味」をめぐるコミュニケーションの豊かさを取り戻し、「内的成長」を促す社会を再構成することだ。それは、個人のレベルで言えば、私たちひとりひとりが自分自身の「内的成長」への感受性を高めるとともに、Xができる人間となることであろう。そして、社会的には、そうした個人レベルの意識に

支えられながら、私たちの「生きる意味」を育むような中間世界、コミュニティーを再創造することである。

私がコミュニティーの「再創造」と言い、「回復」と言わないのは、それがかつてのコミュニティーの再現ではないからだ。コミュニティーを論ずるときに「昔の日本は良かった」と過去を賛美する人は多い。昔の日本の地域社会は皆が助け合い、あたたかかった。昔の母親は愛情に満ちていたものだ。昔の会社は社内一丸の連帯感があったものだ。昔の学校は先生のケンイがあり、もつとびしつと引き締まっていたものだ——等々。

- a それは他人と同じ「生きる意味」を生きることへの強制である。
- b 昔の母の愛情を男たちは賛美するが、「いい母」になること、つまり文句を言わない妻であり母であることが賞賛され、そうでなければコミュニティーからの制裁が加えられたことを多くの女性たちは覚えている。
- c しかし、過去の賛美論者が言うように、昔のコミュニティーに素晴らしいところがあつたにしても、そこには様々な抑圧的な面があつたことを忘れてはならないだろう。
- d 昔のコミュニティーとは「世間」であり、同質な「生きる意味」を持つことが前提とされていた「世間」は、仲間に対してはあたたかかったが、同じ「生きる意味」を持たない異質な人間に対しては極めて冷たかった。
- e コミュニティーの成員は皆同じことにワクワクしなければいけなかった。

同質な人間の苦悩は助けるが、そうでなければ排除する。それは地域社会しかり、会社しかり、学校しかりであつた。

私自身は、個人的には昔の人たちがけっこう好きだ。田舎のおばちゃんたちからの心からの「元気でいなさいね」といった言葉に思わず心がほんわかしてしまうほうだし、そんなソボクな^{（七）}好意や世話焼きに、「やっぱ人間というのはあつたかく、人に優しいのだから」とほっとする。しかし、その一方で日本のムラ社会の閉鎖性、排除性を見せつけられると悲しくなってしまう。どうしてあんなにあたたかい人たち、思いやりのある人たちが集まっていながら、こんなに冷酷に異質な人間を排除する社会になってしまうのかと愕然^{（八）}としてしまうのだ。やはりそこにはこれまでの日本のコミュニティーの質の問題がある。

第二次世界大戦の敗戦は、「異なる意味を生きる人」への配慮を基軸にする社会への転換の好機だつたと言える。しかし、実際はその後の経済成長時代におけるハチクの「勝利」^{（九）}によって、誰もが右肩上がりを求めて生きるべきだという、同質的な「生きる意味」を疑わない社会が温存されてしまった。そして、その社会のあり方は、日本国内の異質なものの、固有の「生きる意味」を生きようとする人たちを抑圧し続けてきたのである。

だから、私たちがいま目指すべきは、

Y

。過去の美質を受け継ぎながらも、その抑圧構造をいったん

破壊しそれをリメイクすること、再創造することが必要なのだ。

それは「私たちの生きる意味を育むコミュニティー」である。「ワクワクすること」を発見し、他の人の「ワクワクすること」と刺
激し合って、相乗的に実現していくようなコミュニティー。そして、「苦悩」が受けとめられ、深い実存的なコミュニケーションの中
から自分の「生きる意味」を発見していけるようなコミュニティー。そうした「内的成長」をもたらすコミュニティーの再創造がいま
こそ求められているのである。

(上田紀行『生きる意味』より)

問1 カタカナで書かれた(ア)～(オ)の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は (ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(ア) キユウシン

- ① 遭難者をキユウジョする。
- ② 代金をセイキユウする。
- ③ キユウダイ点をとる。
- ④ 知識をキユウシユウする。
- ⑤ 大きなハキユウ効果がある。

(イ) シコウ

- ① フクシ施設で働く。
- ② ヨウシをまとめる。
- ③ シキを高める。
- ④ 解散はヒツシだ。
- ⑤ 彼女はシリヨ深い人だ。

(ウ) ケンイ

- ① イシンをかけた勝負。
- ② 年配者にケイイをはらう。
- ③ カンイな手続きで可能だ。
- ④ イケン判決がでる。
- ⑤ イダイな業績を残す。

(エ) ソボク

- ① 確固たるソチをとる。
- ② ソアクな品だ。
- ③ キソを固める。
- ④ 彼とはソエンになった。
- ⑤ ヘイソからお世話になる。

(オ) ハチク

- ① ハモンが広がる。
② 状況をハアクする。
③ 家屋がハソンした。
④ 甲子園をセイハした。
⑤ 人員をハケンする。

問2 傍線部A「現在の日本で力を失ってきているのがこの「中間社会」だ」とあるが、この説明として適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

21

- ① 個人として生きることが、コミュニティーの一員として生きるよりも価値が高いものになったということ。
② 個人として生きることと、国家の一員として生きることが同じレベルで認識されているということ。
③ 地域社会や学校、会社といったコミュニティーが、人々を支える力を失っているということ。
④ 地域社会や学校、会社といったコミュニティーが、遠景である国家に吸収されたということ。
⑤ 同質の人間以外を排除するというコミュニティーのあり方が近代化によって崩壊したということ。

問3 傍線部B「グローバルバリズムとナシヨナリズムや宗教的原理主義がコインの表裏だ」とあるが、この説明として最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

22

- ① グローバリズムの進展により「中間社会」が凋落していく現象と、支えを失った人々が帰属感を満たすために国家や宗教への帰属意識を高めるという現象が密接に関係しているということ。
- ② 新自由主義的なグローバルバリズムと、ナシヨナリズムや宗教的原理主義は、ひとりひとりの個人にとって、いずれも同等の価値を持つものであると認識されるようになってきたということ。
- ③ グローバリズムとナシヨナリズムの進展により、個人が非常にリスクの高い社会の中で生きていかなければならない状況におかれたため、宗教的原理主義が台頭してきたのだということ。
- ④ 人間はそもそも「支えの」ない社会には生きていけない存在であるが、古い宗教的な価値観やナシヨナリズムではなく、グローバルバリズムに対して帰属意識をもつようになったということ。
- ⑤ 人間を支えてきたナシヨナリズムや宗教的原理主義といった「中間社会」がもはやなくなってしまったため、むき出しになった「個」がグローバルバリズムを肯定しているということ。

問4 傍線部C「グローバリズムとナショナリズムや原理主義とはそもそもは全く正反対のものである」とあるが、この説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 23

- ① グローバリズムが経済界において「数字信仰」に基づいているのに対して、ナショナリズムや原理主義は、「信仰」を個人々の意識の問題として理解しているということ。
- ② グローバリズムが「遠景」である国家との関係で語られるのに対し、ナショナリズムや原理主義は「中間社会」を失った個人という「近景」の中で語られるということ。
- ③ グローバリズムが会社の同僚を生き残りをかけたライバルであることとみなすのに対して、ナショナリズムや原理主義はコミュニティのメンバーを仲間とみなすということ。
- ④ グローバリズムが経済的・社会的発展をめざしているのに対して、ナショナリズムや原理主義は、社会全体の福利を最大にすることをめざしているということ。
- ⑤ グローバリズムが国家というまとまりを解体する方向性をもっているのに対して、ナショナリズムや原理主義は強い帰属意識にもとづいて成立しているということ。

問5 傍線部D「グローバリズムもナショナリズムも「多様な意味」の圧殺の上に成り立っている」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい

解答番号は

- ① グローバリズムもナショナリズムも、暴力によって「生きる意味」を奪っているから。
- ② グローバリズムもナショナリズムも、個々の自由を奪うことによって成長してきたから。
- ③ グローバリズムもナショナリズムも、国ごとに異なっていた文化を均一化していったから。
- ④ グローバリズムは「数字」、ナショナリズムは同一性の意識により他の価値を捨象するから。
- ⑤ グローバリズムは経済の発展、ナショナリズムは国家の発展に最も高い価値を置いているから。

問6 空欄 と に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 、、、

- X
- ① 抑圧的な帰属意識から脱却
 - ② 他者と共有することを喜ぶこと
 - ③ 他国の文化や慣習に対する配慮
 - ④ 他者の「生きる意味」への配慮
 - ⑤ 物事を「数字」で解決することからの脱却

Y

- ① ナショナリズムや原理主義への対抗ではない
② かつてのコミュニティーの回復ではない
③ 「生きる意味」を再構築することだ
④ グローバリズムからの脱却ではない
⑤ かつての「中間社会」を回復することだ

問7 本文中の で囲んだaとeの文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選

びなさい。

解答番号は 27

- ① c | a | e | b | d
② c | b | e | d | a
③ c | d | e | a | b
④ e | a | b | d | c
⑤ e | d | c | b | a

問8 本文の主旨と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 28

- ① 現在の日本における中間社会が私たちを支えるものでなくなってきたという現状は、新自由主義的なグローバル化がもたらしたもので、人間は一人では生きていけない存在である以上、かつてのコミュニティに見られた助け合いを再び復活させることが強く求められている。
- ② 新自由主義的なグローバル化の進展により、私たちを支えてきた中間社会が力を失ったため、むきだしになった「個」は国家や宗教への帰属意識を高め、多様性を認めない社会が成立したが、私たちの社会に今必要なことは、生きる意味をはぐくむコミュニティの再構築である。
- ③ 私たちは現在、かつてのコミュニティの、「中間社会」の崩壊の時代を生きているが、それはかつて日本でみられたムラ社会の閉鎖性や排他性といった異質なものを排除する社会との決別を意味し、私たちひとりひとは「個」として自由を獲得したのだから多少のリスクはやむをえない。
- ④ グローバリズムとナショナルリズム・原理主義はそもそも正反対のものであり、それが現在の世界で併存していることは、私たちの価値観を混乱させる原因の一つとなっており、「生きる意味」の回復のためにも、中間世界であるコミュニティを早急に回復することが必要である。
- ⑤ ナショナルリズムや原理主義が台頭してきた背景には、新自由主義的なグローバル化の進展によって、中間社会としてのコミュニティが崩壊し、人々が支えを失うなか、専門家と素人とで経済的な格差が拡大したことが挙げられ、すべての責任を個人に負わせる新自由主義の弊害である。

(白紙ページ)

(白紙ページ)

